

現在する歴史

今号のテーマは建築と歴史である。オーソドックスなテーマかもしれないが、ここで注目しているのは、一般に建築史なる学問領域として確立されている「建築の歴史」ではない。それと不可分にせよ、より人々の日常に根ざした「歴史としての建築」といったものを想定している。いわゆる歴史的な名建築に限らず、建築は歴史を内包し、それを日常に現在させている。そのことについて考えてみたいと思った。

インディペンデントな個人雑誌とはいえ、創刊して五年も経てばテンションは徐々に落ちてくる。雑誌を作るのはそれなりに骨が折れるし、自主的で内発的な媒体である以上、なんでもかんでもとりあえず定期的に出版すればよいというわけにもいかない。二〇一四年に『建築と日常』の刊行物が何もなかったのはそんなことが関係しているが、一方でこの号が本誌初の合併号として分厚くなったのも、やはりそこが関係している。つまり「現在する歴史」を特集することに強いモチベーションがあったということだ。

とりわけ最近、普段の生活においても、歴史的な感覚「下段参照」の欠如を感じさせられる場面が多い。「今、ここ」が歴史的な時間や空間の連続から切断され、断片化し、絶対化している。おそらくその最たるものは「戦後レジームからの脱却」を謳う政治のシーンにあるだろう。例えばそのスローガ

ンは、表面上、戦後の歴史というものにひどく意識的であるように見える。ところが内実は、戦後の歴史に対する批判や反省というよりも、歴史自体をなかつたことにする、歴史からの断絶に違いない。政治家こそ「今、ここ」を超えた世界を見通す目を持たなければならぬにもかかわらず、歴史的に存在する他者、他者の議論、他者の経験、他者の生活などをことごとく無視し、自分もしくは自分たちがいる「今、ここ」の欲望に囚われている。言葉は唾然とするほど空疎になっている。

もちろんこの傾向は、政治の領域に限定して囲い込むことができるわけではない。二〇世紀後半以降の物質主義、情報社会が、個々の物質や情報を繋ぐはずの大きな秩序をいよいよ骨抜きにし、それぞれの「今、ここ」を断片化し、絶対化させている。インターネットは確かに離れた場所同士を繋げるが、その前提条件として求められるのは、今も昔も変わらず、離れた場所を想像する個人個人の感覚であり意志であるはずだ。昨今のSNS（ソーシャル・ネットワークキング・サービス）の大勢が、実体と乖離させてまで「よりハイレベルな自分」を見せることの競い合い、目に付いた人物ないし現象を自分に都合よく要約してレッテルを貼って切り捨てる手つきあるいはスピードの競い合い、要するに現実の世界の複雑さを意に介さず振る舞える凶々しい人間ほど大きな顔をしていられる類のシステムになっていることは、やはりなんらかの肉感的な感覚の欠如を促進させていると言うほかないし、そこで反復

この特集における「歴史的な感覚」という言葉は、T・S・エリオット（1898-1969）が詩の創作を論じた「伝統と個人的な才能」（1919）での用語をおおむね下敷きにしてしている。そこでこの詩は建築にも置き換えられるように思う。

エリオット——「……我々が或る詩人を褒める時に、その仕事で他の誰にも似ていない点、特に強調したがる癖がある。我々はそういう点、或いは仕事の部分に、その詩人の個性的なもの、その詩人に特有の本質があると思ひ、彼が彼以前の人々、殊に彼の直ぐ前の人々とどういう風に異っているかに注意して、何かそれだけ切り放して楽しめるものを探そうとする。ところが、もし我々がそういう偏見に捉えられずに或る詩人の作品を読むならば、しばしばその一番いい部分だけでなくて、最も個性的なのは、彼の祖先である死んだ詩人達がその不滅性を最も旺盛に発揮している部分であることを発見するに違いない。そして私はこれを、他人の影響を一番受け易い青年期ではなくて、詩人が十分に成熟した後の作品について言っているのである。

しかしもし伝統というものの、何かを伝え、何かを受け継ぐということが、単に我々の直ぐ前の時代に属する人々が収めた成功を臆病に、盲目的に真似て、一歩も自分で踏み出すことをし

ないことであるならば、「伝統」ははつきり否定されなければならない。我々はそういう単純な流れが砂の中に消えるのを何度も見て来たのであって、新しいということの方が、繰り返しよりもまだしも増しなのである。伝統というのは、そういうことなのではない。それは遺産として相続出来るものではなくて、伝統が欲しければ、非常な苦勞をしてこれを手に入れなければならない。それには第一に、歴史的な感覚というものが必要であつて、これは二十五を過ぎてもからず詩人であることを続けたいものには、先ず絶対になくなくてはならないと言つていい。そしてこの歴史的な感覚は、過去が過去であるということだけでなくて、過去が現在に生きていくということだけである。この歴史的な感覚には置かないものなのである。この歴史的な感覚は、時間的なものばかりでなくて、時間を越えたものに対する感覚であり、そして又、時間的なものと時間を越えたものを一緒に認識する感覚でもあつて、それがあつて文学者に

され続ける態度はインターネットの外の世界の秩序も書き換えていく。

事実、世界は時間的にも空間的にもさまざまに繋がって、有機的な全体をなしている。そう考えることは、世界を一元的に抽象化して捉えることではないし、その全体はおそらく記述することができない。外側から輪郭を見取れるような全体ではなく、内側でその都度個別に繋がりが感じられるような全体なのだと思う。そしてそれを感じ取らせるのが歴史的な感覚だ。どんな時代であれ、どんな文化であれ、人々の日常の根本はそう変わるものではないのだから、それぞれの日常の経験が離れた場所同士を繋ぐ。と同時に、その共感があるからこそ、各時代や各文化の固有性も認識される。

昭和の宰相・吉田茂(1878-1967)の息子、文士の吉田健一(1912-77)は、この特集における重要人物の一人だが、彼はここで言う「現在する歴史」について、左のように書いている。

吉田——「…」歴史のことが念頭になくても歴史が我々に呼び掛ける。それが例へば天平時代の建築の屋根に一樣に認められる勾配、或は奈良を取り巻く山の稜線、或はルネッサンスの時からあるイタリイの町の寺院で目を惹くモザイク風の壁であつて人間が作ったもの、或は人間が自然の領域で残した跡はそれが昔のものであることで片付けられない力を今も持つてゐる。「…」これを突き詰めて行けば人間の歴史と人間の現状の區別が付け難くなるのであるよりもそのやうなことが出来ないことが解る。どこまでがそれならば現

状なのか。我々の意識をなしてゐるものには昨日の出来事もあればアメリカの獨立もあり、そこに我々の友達もゐれば方孝孺も明の成祖もゐる歴史といふものの定義からすればこれは當然のことであるが我々の現状をなしてゐるものの大部分が歴史に屬してゐる。それを我々の意識から全部取り去つた後に何が残るかは昨日以前の記憶がない人間の場合と變らなくて正常な人間に就てそのやうなことを想定する必要はない。

(吉田健一『時間』新潮社、一九七六年、一九七〜一九八頁)

いわば歴史と世界、あるいは過去と現在は、人間にとつて分離できない。

この吉田健一の文章で、歴史を現在させるものとして、まず建築や都市的環境が例に挙げられていることは興味深い。建築は「今、ここ」の場所をつくりだすと同時に、過去の痕跡であり、未来の兆候である。あらゆる文化的な事物がそんな人間の持続性を内包させているとしても、建築はその質が比較的顕著であるように思う。建築は時間のスケールとしても空間のスケールとしても、個である人間に対して超越的であり、なおかつ毎日の生活と一体化して、無意識のうちに人々をそれぞれの文化的・歴史的世界に位置づける。日常の経験の共有が離れた場所同士を繋ぐとすれば、その日常を成り立たせる建築は、人間の普遍性と時代や文化の個性性を併せ持つ両義的な存在だと言えるかもしれない。この特集では、私たちが生きる世界に歴史が現在することの意味を、そんな建築を考えることによつて顧みる。

伝統というものを持たせる。そしてそれは同時に、時間の流れの中で彼が占めている位置と、彼自身が属している時代に対して、彼を最も敏感にするものなのである。

どんな詩人も、或いはその他、どんな芸術家も、自分一人だけでは完全な意味を持つことが出来ない。彼が持つ意味を評価するというのは、死んだ詩人達その他の芸術家に対する彼の関心を評価することに他ならない。彼だけを対象にしても駄目で、対照したり、比較したりする為に、彼を死人の中に置いて見なければならぬのである。そして私はこれを、単に歴史的な批評の立場からだけでなく、美学上の一つの原理として言っているのである。そして芸術家がこうして過去に順応し、それと一体をなさなければならぬというのは一方的なことではないので、一つの新しい芸術作品が創造された時に起ることは、それ以前にあった芸術作品のすべてにも、同時に起る。すでに存在している幾多の芸術作品はそれだけで、一つの抽象的な秩序をなしているものであり、それが新しい(本当の意味で新しい)芸術作品がその中に置かれることによつて変更される。この秩序は、新しい芸術作品が現われる前にすでに出来上っているもので、それで新しいものが入つて来た後も

秩序が破れずにいる為には、それまでの秩序全体がほんの少しばかりでも改められ、全体に対する一つ一つの芸術作品の関係や、比率や、価値などが修正されなければならないのであり、それが、古いものと新しいものとの相互間の順応ということなのである。そしてこの秩序の觀念、このヨーロッパ文学、及び英国の文学というものの形態を認めるならば、現在が過去に倣うのと同様に過去が現在によつて変更されるのを別に不思議に思うことはない。しかしこれを理解した詩人は多くの困難と、大きな責任を感じなければならぬことになる。(吉田健一訳、『エリオット選集第1巻』彌生書房、一九五九年)

ちなみに別冊『多木浩一と建築』(2013)で特集した多木浩二(1928-2011)は、学生時に読んだこの文章に対し、次のように書いている。

多木——伝統などというものに反発していた当時の青二才にとつて、エリオットの保守性は微妙な位置にあった。「…」しかしエリオットが「伝統と個人の才能」で語った言葉は深く内面に染み込み、今にいたるまで私の精神を支配している。「…」私は詩人であろうとはいかなかったが、その歴史的意識は散文家にとつても重要であった。(多木浩二『雑学者の夢』岩波書店、二〇〇四年、四頁)